

新聞ヨム、社会ワカル。

—春の新聞週間に寄せて

中

正直驚かされた。連載が始まった当初、女子高校生からのメールによる反応が目立った。硬いイメージがつきまとう新聞の一面に、彼女らが目をやってくれていたこと自体が感動だったし、反応内容がまた美に良かった。

絵文字を駆使しての若者特有の文面もあったりしたが、どれもまじめに受け止めてくれていたのだ。一部はすでに紙面で紹介もしたけれど、途上国の厳しい現実、わが身の今を反省する者、将来国際貢献の舞台で活動したいと意欲を燃やす者：取材班に質問をしてきて、やりとりすることも少なからずあった。

手と手と手 岡山発 国際貢献

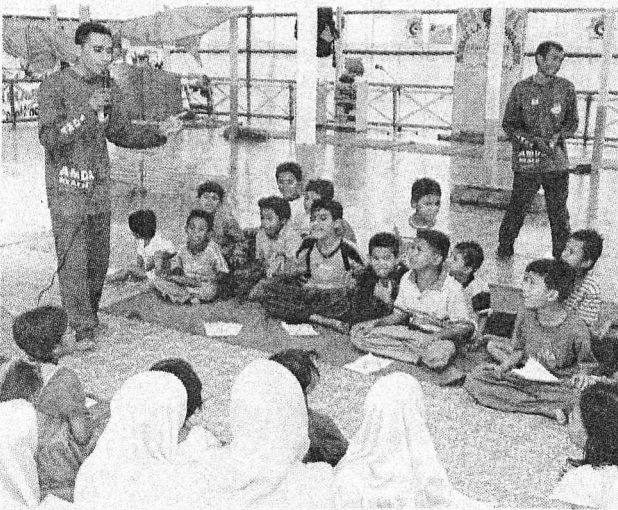
メルなどの便りは、女子高校生ほどではないが、男子高校生からも寄せられたし、最年少は十二歳の男子。毎日読んでいるというこの子は、は

がきに手書きで、「戦争などもう二度としてはならない」と思いました。内戦に疲弊したカンボジアの実情を知った感想をつづっていた。

連載は元日から始め、第一部で国際医療ボランティアAMDAなど岡山に本拠を置くNGO（非政府組織）三団体の途上国支援活動を取り上げ、二部は都道府県で唯一国際貢献条例を施行している岡山県を中心に、

県内市町村の動きも追った。三部は企業の利潤追求を離れての貢献活動を取上げ、四部で人材養成を担う大学の取り組みへと入っている。

今後さらに五部、六部へと展開をしていくが、取材班六人が連載を始めるとき最も気になったのは、取材の舞台が海外を中心とするので、身近に



スマトラ沖地震の津波被害を受けた子どもたちへ支援活動を行うAMDA（昨年11月、インドネシア・アチェ州）

若者の反応に感動

感じてもらえないのではということだった。が、反応でみるかぎりそれは杞憂で、取り上げたNGOや企業に対し、寄付を含めた支援を申し出る人が相当数に上っているし、自分ごとな貢献活動ができるか、真剣に考えている人が目立つ。

取材班が戒めているのは、国際貢献などと銘打てば、どうかすると建前に流されがちになるので、それは厳に慎もうということだ。現場主義に徹して事実を忠実に掘り起こしながら、実のある貢献活動を考えたいと思っているし、貢献活動は特別なものではなく、できることをできる範囲で行えばいいのだという理解を、読者とのやりとりも通じて広げていければ幸いだ。（横田賢一）